

## 甘美な戦慄：ジェイコブス『猿の手』をめぐって

森, 茂太郎  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/8802>

---

出版情報：Stella. 24, pp.93-105, 2005-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 甘美な戦慄

——ジェイコブズ『猿の手』をめぐる——

森 茂太郎

「恐ろしさ——恐ろしさだよ！」

「まあ、素敵なこと！」ひとりの婦人が言った。

H・ジェイムズ『ねじの回転』

さして短いとは言えない作家生活のあいだに発表した数多くの作品のうち、たった一篇の傑作で名を残す、どこの国の文学史にもそういう幸運な、あるいは不運な作家が一人や二人はいるものだが、19世紀後半から20世紀前半にかけて活躍した英国の大衆小説家ジェイコブズはそのような作家の典型であろう。生前絶大な人気を博したと伝えられるこの作家の海洋小説やユーモア小説が、今日、英米の読者にどのように迎えられているのかは知らない。ただ、ジェイコブズの名前がわれわれ異国の読者のあいだでも知られているのは、彼が残した恐怖小説の名作、『猿の手』<sup>1)</sup>ただ一作のおかげであることは疑うべくもない。幻想小説の愛読者を自認するほどの者で、『猿の手』を知らぬ者はあるまい。幻想小説や怪奇小説のアンソロジーの類にはまず間違いなくその名が見られるし、この小説の標題をそのままメインタイトルにした例も珍しくない。すなわち『猿の手』は、幻想小説の代表作をかりにいくつか選ぶとしたなら、真っ先にその名が浮ぶ傑作のひとつなのである。

ストーリーはいたって単純である。英国の片田舎で隠居生活を送っている老夫婦のもとに、インド帰りの知人が訪ねて来る。遠来の客は、みやげ話のついでに、3つの願いがかなうという猿の手を夫妻に見せる。好奇心を刺激された夫は、しぶる客から猿の手を譲り受ける。息子の発案で冗談まじりに立てた願いは、家の抵当を抜くのに必要な200ポンドを授かりたいというものであった。翌日、その金は手に入る。だがそれは、工場で働いていた一人息子が事故で死亡し、会社が見舞金を支払ったからである。悲しみで半狂乱になった夫人

は、夫を説き伏せ、息子をこの世に呼び戻すべく第2の願いを立てる。やがてのことに、玄関の扉をノックする音が家中に響きわたる。恐怖にかられた夫は、息子をふたたび死者の国へ送り返すため、第3の、そして最後の願いを唱える。

こう要約してみてもすぐさま気づくのは、この小説がおなじみの民話『3つの願い』を素材にしていることである。古くから伝わる民話の常として、この『3つの願い』にもペローによる翻案をはじめ様々なヴァリエントが存在するが、おそらく今日もっともよく知られているのは『暦物語』のヘーベルによるものであろう。

ある若い百姓の夫婦が仲睦まじく幸せに暮していた<sup>2)</sup>。ある日、美しい山の精が訪れ、3つの願いをかなえてやろうと約束する。夫婦は大いに喜んで、さて何を願ったものかと思案する。間近な幸福を夢に描きつつ、ふたりで貧しい食卓を囲んでいるとき、思わず細君が「ああ、これに焼きソーセージがあればねえ」と口走る。その途端、ふたりの目の前に、世にもみごとな焼きソーセージがあらわれる。腹を立てた亭主は、「こんなソーセージなんか、おまえさんの鼻にくっつきゃいいんだ」と悪態をつく。間髪を入れず、細君の鼻先にソーセージがぶら下がる。3番目の願いは、いまさら念を押すまでもなく、哀れな細君の鼻を元に戻すために使われる。

『猿の手』と『3つの願い』と、こうして並べてみると、2つの物語の筋立てが酷似していることは誰の目にも明らかであろう。この借用ないし本歌取りが、無意識的な記憶の産物ではなく、おそらく意図的になされているにちがいないことは、猿の手のもつ不思議な力を耳にした夫人が、「まるでアラビアン・ナイトのお話みたいですこと」と感嘆したり、「お父さん、あなた、私に4人前の手が授かるようになって、考えていらっしゃるんじゃないでしょうね？」<sup>3)</sup>と夫をからかったりするところにかがわれる。

ところでフロイトは、1915年から16年にかけて、一般大衆を相手に行われた講義『精神分析入門』のなかで、夢は欲望の実現であるという自説をかみ砕いて説明するために、ヘーベルの『3つの願い』を引き合いに出している――

欲望の実現はたしかに快樂をもたらします。しかし問題は、こうして快樂を得るのがいったい誰か、ということです。もちろん、それは欲望する者です。しかし私たちは、夢を見ている者が自分の欲望ときわめて特殊な関係にあることを知ってい

ます。つまり夢を見る者は、自分の欲望を拒み、検閲し、一言でいえば、それについては何も知らうとしないのです。ですから、欲望の実現は快樂をもたらすどころか、かえってその反対のものをもたらします。経験は、この反対のものが——これについてはなお解明を要しますが——不安というかたちであられることを教えています。つまり夢を見る者は、夢のなかの欲望に対する関係からいうと、ふたりの人物によって、きわめて密接な関係にあるふたりの人物で構成されているように見えるのです。<sup>4)</sup>

夢のなかには「ふたりの人物」がいて、一方の「欲望の実現」は、他方にとっては「不快の源泉」になる。ヘーベルの昔話は夢分析から得られたこの結論を、精神分析に不案内な聴衆にもわかりやすく説明するために引かれているのだが、引用されるのがヘーベルの『3つの願い』ではなくジェイコブズの『猿の手』であったとしても、フロイトの目的は充分果たされたにちがいない。いや、ヘーベルの昔話が、通常のありきたりな夢ではなく、フロイトのテーゼに反すると見なされかねない悪夢を説明する目的で引かれていることを思えば、ジェイコブズの怪談のほうが譬えとしてはむしろ似つかわしいかもしれぬ。

ヘーベルの『3つの願い』では、夢のなかの「ふたりの人物」は、百姓の亭主と細君に割りふられている。最初に「欲望する者」は細君であり、細君の欲望の実現は亭主にとっては「不快の源泉」である。ところが『猿の手』においては、少なくとも第1の願いに関するかぎり、まだ「ふたりの人物」のあいだに分裂は生じていない。第1の願いの実現を夫人がまんざら期待していないわけでもないらしいことは、翌日、郵便配達夫がドアをノックしたとき、半信半疑ながら、「急いで玄関までとびだして行く」<sup>5)</sup>その姿からも明らかである。両者の分裂が決定的になり、一方の「欲望の実現」がまさしく他方の「不快の源泉」になるのは、死んだ息子をなんとしても取り戻そうとする夫人の第2の願いに関してである——

「お願いしてください！」彼女は強い声で叫んだ。

「ばかげてる、けしからんことだ」彼は口ごもった。

「お願いしてください！」妻は重ねて言った。

老人は片手を高く揚げた。「願わくは、息子をよみがえらせたまえ」

とたんに、猿の手が床の上に落ちた。老人は慄えながら、床の上に落ちた猿の手を見つめていた。<sup>6)</sup>

第2の願いの実現によって「快樂」を得る者は夫人である。彼女にとっては死んだ息子の復活こそが「欲望の実現」であり、無上の「快樂」なのだ。したがって、ヘーベルの『3つの願い』で細君の第1の願いに続いてなされた亭主の欲望実現、すなわち「細君の愚かな願望に下された懲罰」<sup>7)</sup>にほかならない欲望実現は、ジェイコブズの物語では、第3の願いにおいて果たされることになる。そしてこの最後の願いにおける夫の「欲望の実現」は、息子をこの世に呼び戻すという望みを完全に断たれた夫人の悲嘆と絶望なのだ。読者の笑いを誘うヘーベルの物語とは対照的に、ジェイコブズの小説のかもしれない雰囲気も陰惨であり悲劇的であるとすれば、夢のなかの「ふたりの人物」が最後まで分裂したままであり、民話の百姓夫婦のように、物語の結末にいたってふたたび統合されるということがないからであろう。

\*

エディプス期以前の幼児の世界は、ある種の児童心理学者や精神分析学者が好んで想像したがるような、母と子の閉ざされた世界、母と子が一体化したユートピアなどではない。彼らが学問の名のもとに空想するこうした神話的世界は、それ自体神話的思考の産物にすぎないが、しかし子供が生まれた後、2つの個体に分裂したはずの母と子のなかに、このような一体化の幻想が生き続けていることもまた確実なのである。つまり母親は、子供をみずからの欲望を充たす存在、みずからの欠如を埋める唯一の存在と見なすのだ。このとき子供は母のファロス、かけがえのないファロスである。一方、子供もまた母親の欲望を満足させるため、母の欲望の対象、ファロスに自己を同一化しようとする。この同一化が首尾よく果たされれば、母と子のユートピア、母子が緊密に結びついた無何有郷がたしかに実現されるであろう。とはいえ、こうしたユートピアの実現は、少なくとも子供にとっては、すべてが望ましいものであるとはかぎらない。なぜなら母のファロスに同一化することは、そのまま母の欠如に同一化することであり、主体としてのみずからの存在を放棄することに等しいからだ。すなわち、母子合一のユートピアは、子供にとってやみがたいノスタルジアの対象であると同時に、恐怖をそそる暗黒の深淵でもある。恐怖と魅惑の分ちがたく入り交じったこの不安な情動こそ、フロイトが「無気味 unheimlich」

という言葉で名指そうとしたものにほかならない。

子供がエディプス期に達すると、これまで局外者として母子の二者関係の周縁にとどまっていた父が暴力的に介入し、母と子のあいだの内密な絆を切断する。父親は子供からはその欲望の対象を奪い、母親からはファロスを剥奪する。このとき、父がその「名」において下す宣告は次のようなものである。すなわち、子に対しては、「おまえは母と寝てはいけない」。母に対しては、「おまえは自分の生み落したものをふたたび取り込んではいけません」。この瞬間、母子合体の幻想は罪の烙印を捺され、禁断の欲望としてきびしく断罪されることになる。去勢とは、したがって、何よりもまず母のファロスの切断であり、この切断によってこそ、子は母に対する「性的奉仕」<sup>8)</sup>のくびきを脱し、主体としての単独性を手にすることができるのだ。

こうして「父の隠喩」が成立する。母の欲望——母の子に対する欲望であると同時に、子の母に対する欲望でもある——に「父の名」のシニフィアンが代置され、子供は母のファロスで「ある」ことを断念し、父に同一化したファロスを「もつ」欲望の主体としてみずからの道を歩み始める。これがエディプス・コンプレックスの終焉である。

\*

200 ポンドの代償として息子は死ぬ。フロイトの夢分析は、夢のなかにあらわれる「死」の表象が「去勢」の象徴であることを教えているが、フロイトの指摘によらずとも、機械に巻き込まれて「ずたずたに引き裂かれた」<sup>9)</sup>酷たらしい息子の死に、ほかならぬ去勢の象徴を見てとることは容易であろう。長男の無惨な最期は、夫人に課せられた第2の去勢である。しかし、かつて一度は成功したはずの母の去勢が、今回にかぎって破綻を来しそうになるのはなぜなのか。死の国へ旅立ったはずの息子が、いきなり踵を返して家路をたどり始めるのはなぜなのか。あらゆる願い事のかなう猿の手があるからだ、というのでは話にならない。もちろん猿の手の存在を無視することはできないが、効験あらたかなこの呪符を使うも使わないも、すべては夫人の意志ひとつにかかっているからである。謎を解く鍵は、この小説の冒頭、父親と息子がチェスをする場面に隠されている——

外は寒い晩で、雨がしとしと降っていたが、レイクスナム荘のこじんまりした客間には、ブラインドが下され、暖炉があかあかと燃えていた。父親と息子がチェスをしていた。父親のほうは、変り身の早さで相手を煙に巻こうというハツタリ将棋で、今夜もわざとキングをきわどいあたりへ無鉄砲に進めてきたりするので、炉ばたで静かに編物をしていた白髪頭の老夫人までが、見かねて口を出すという始末。<sup>10)</sup>

この冒頭の場面からたやすく読みとれるのは、父親と息子がライヴァル関係にあることである。父の権威が失墜し、家庭内の秩序が乱れることをホワイト氏は恐れている。彼がキングを「わざときわどいあたりへ無鉄砲に進めてきたり」するのは、そういう彼の焦燥感のあらわれであろう。が、とどのつまり、ホワイト氏は息子にキングを奪われてしまう。いや、チェスの結果を俟つまでもなく、ホワイト家では「キング」の座はすでに息子に奪われているのだ。父親はとうの昔に隠退して、ホワイト家の家計を実質的に支えているのは、工場に稼ぎに出ている長男だからである。チェスの勝負で息子に打ち負かされ、思わず感情を昂ぶらせ、「この次はあなたが勝ちますよ」と老妻に慰められるホワイト氏に権威ある父親の面影はない。そればかりか、ぼつの悪い微笑を浮べる彼の背後で、母と息子は「心得顔に目と目を見交わし」<sup>11)</sup>たりもするのである。すなわち、この冒頭の場面に象徴的に示されているのは、ホワイト氏が「キング」の座からすべり落ちていること、定年後の自分が置かれた境遇を受け容れることができず、そのために息子とライヴァル関係になるまでに退行していることである。

去勢され、遠く離れた墓地に埋葬されたはずの息子が舞い戻ってくるとすれば、それはホワイト氏が妻の「尻に敷かれ」<sup>12)</sup>、世界の秩序を支えるべき「父の名」が機能不全に陥っているからである。いまや崩落寸前の世界の背後から無気味に迫り上がってくるのは、あの母の欲望、生死を隔てる境界をものともせず、失われたファロスを奪い返そうとする母親のあくなき執念なのだ――

〔…〕そのとき、また大きなノックの音が家中に響きわたった。

「ハーバートですわ！ ハーバートですわ！」と、彼女は叫んだ。

いきなり彼女は、部屋の入口へ駆け寄った。が、老人はその前に立ち塞がり、彼女の腕をつかむと、ありったけの力で押えつけた。

「何をしようというんだ？」老人は押し殺した声で言った。

「あの子です、ハーパートですよ！」と、彼女は夢中で身をもがきながら叫んだ。〔…〕  
 「入れちゃいけない、入れちゃいけないぞ！」老人はわなわな慄えながら叫んだ。〔…〕  
 そのとき、またノックの音がした。つづいて、また鳴った。老女はいきなり身をよじると、夫の手を逃れて、部屋の外へ走り出た。<sup>13)</sup>

こうして息子の復活に狼狽したホワイト氏が3度目の願いを唱える最後の瞬間まで、物語の展開の主導権は終始夫人の手に握られている。それなら、母の欲望の成就の刻限が迫るとともに、われわれ読者の不安も次第に高まってゆくのはなぜなのか。「家中に響きわたる「ノックの音」とともに、われわれの不安もまた最高潮に達するのはなぜなのか。『妖精物語からSFへ』のロジェ・カイヨワなら、「現実世界の内的統一」<sup>14)</sup>に亀裂が生じたからだと言うだろう。カイヨワの見解は、それはそれとして、たしかに間違っていない。死んだ息子の復活というありうべからざる事態の到来は、「奇蹟や魔法があたりまえのことになっている」妖精物語とは異なり、「厳然と不壊の掟に支配されると見えていた」幻想小説の世界の秩序を破壊するからである。だが、果たしてそれだけであろうか。われわれ読者が固唾を呑んで事のなりゆきを見守るのは、ただ亡霊が出現するから、世界の安定が脅かされるから、というにすぎないのだろうか。このような疑いをわれわれがいだくのは、物語の進展とともに次第に高まりゆくわれわれの不安のなかには、一種甘美な味わいもまた含まれているからである。人も知るとおり、恐怖とないまぜになったこの甘美さこそ、幻想小説の持ち味なのだ。もちろんカイヨワほどの人が、幻想小説固有のこうした魅力に気づいていないわけではない。なぜなら彼は、この卓抜な幻想文学論のあるところで、「幽霊譚の魅力」はそれが孕む「甘美な戦慄」<sup>15)</sup>にあるとはっきり述べているからである。幻想小説のジャンルの特性を見きわめようとするカイヨワがぜひとも説明しなければならないのは、「戦慄」とないまぜになったこの「甘美な」味わいなのだ。

実はカイヨワはこの論文の最初のところで、ほかでもない、ジェイコブズの『猿の手』を俎上にのせ、『3つの願い』との対比において幻想小説の特質を明らかにしようとしている。2つの物語を比較することによってカイヨワが導き出した結論は、次のようなものである――

2つの物語の構造は完全にパラレルである。ただし、詳細に見れば両者ははっきり

異なっていて、その違いは、一方がおかしくて他方がおそろしいというだけのものではない。2つの物語の成立条件そのものに、根本的な対照性があるのだ。民話にあって百姓夫婦の失望を招来しているのは、事物の自然な秩序に背反する3つの奇蹟である。一方のジェイコブズの物語でも、猿の手という幻想的な護符の力が事のなりゆきを左右することになってはいるけれど、そのことは、いかにも回避しがたきものと思われる因果の連累を通じて読みとれるというにすぎず、原因自体はいたって漠然としているし、結果もまた曖昧なままなのである。3つの願いは、現実世界との明白な断絶をきたすことのないままにかなえられている。その秩序に矛盾するようなことはなにひとつ起ってはいないのだ。工場での事故、補償金の支払い、夜半に扉をたたく音、姿を消した奇怪な訪問者等、いずれの出来事もみな、猿の手にそなわった悪しき力で説明がつくのであろう。しかし、たとえばその秘密を知らぬ者、破滅的な護符の力など信じぬ者が見れば、この一連の悲劇に認められるのは、偶然の一致と自己暗示であるにすぎないだろう。ただ、そこでは、日常生活の不変の掟に一条の裂け目が生じている。小さくて目につかず、さだかでもない裂け目だが、それでも、恐怖の侵入を許すには充分の裂け目が。<sup>16)</sup>

カイヨワがここで比較を試みている『3つの願い』はヘーベルのものではない。ヘーベルの翻案と同じくらい人口に膾炙したペローのものである<sup>17)</sup>。2つの翻案を比べてみると、筋立てそのものは似かよっているものの、仔細に点検すると若干の相違があり、ペローの翻案では、物語の冒頭、「ほかほかの腸詰」をほしがるのは、細君ではなく亭主であることになっている。自分のしでかしたへまをやかましく咎め立てされるのに業を煮やした亭主が、「こんな腸詰、この口うるさい百姓女の鼻にでも貼りつけばいい」と罵ったところ、たちまちそのようになる。

だが、カイヨワはここで奇妙な思い違いをしている。彼の要約では、第2の願いを口にするのは亭主ではなく、亭主のへまに腹を立てた細君が、「こんな腸詰、この間拔けな百姓男の鼻に貼りつけばいい」と願うことになっているのだ。同じような話は中世ヨーロッパ全域にわたって流布していたにちがいないから、こうしたヴァージョンもありえないではないが、女房の、ではなく、亭主の鼻に腸詰がぶら下がるところに着目するなら、『3つの願い』の系列でこれと似たものを探し出すとすれば、われわれは『千一夜物語』まで遡らなければならない。

千一夜版『3つの願い』には、親切な山の妖精も、ほかほかの腸詰も登場しない<sup>18)</sup>。敬虔な信徒の望みが必ずかなうという「奇蹟の夜」、主人公の男は巨大

なファロスを願う。願いはたちまちかなえられ、「さながら2つの巨大な南瓜のあいだに休らう瓢箪と見まごうばかり」大いなる一物を男は授かる。しかし、そのあまりの巨大さに妻が恐れをなしたため、やむなく夫はこの邪魔物を取り去ってほしいと神に祈る。祈るが早いか、男の下腹は「小娘さながら」のっぺりして、股間には何もなくなってしまう。「聖なる男の悩みははなはだしく」、第3の願いは、もちろんのこと、股間を元通りに修復するために使われる。

カイヨワがうっかり勘違いして、記憶のなかでペローの翻案と混ぜ合わせてしまったのがヘーベルの昔話なのか、それとも千一夜版『3つの願い』なのかはわからない。しかし、腸詰が夫の鼻にぶら下がるのと、妻の鼻にぶら下がるのとでは、その意味合いがまるで違う。腸詰ないしソーセージがほかならぬファロスの象徴であることは、ファロスそのものがあからさまに誇示される『千一夜』を見ても、女房の下腹に椅子の脚がくっつくという、ペローのものよりやや以前のファブリオ<sup>19)</sup>を見ても、おそらくかなりの説得力をもって受け入れられる解釈にちがいないが、しかし亭主がいまひとつ余計にファロスを所有したところで、それは『千一夜』の「聖なる男」の巨魁な一物と同じく、せいぜい肉体的な逸脱ないしは畸形というにとどまり、この世界の安定を脅かすにはいたらない。しかし腸詰＝ファロスが妻の身体に接合されるとなると、いささか事情は異なる。うかつにも亭主の鼻に腸詰をぶら下げたカイヨワは、そのことによって、『猿の手』の孕む真に無気味な意味合いを掴みそこねてしまったのではないだろうか。

ジェイコブズの『猿の手』が真底無気味であり、われわれの不安を煽ってやまないとすれば、ここでは、フロイトが「無気味なもの」について語ったように、「古くから知られたもの」、「昔なじみのもの」、「秘め隠されたもの」<sup>20)</sup>が浮上して来ようとしているからである。フロイトによれば、「無気味なもの」は、「誰もが一度、そして最初に滞在した場所」<sup>21)</sup>の回帰であり、主体の最深部にひそむ主客未分化の悦楽、すなわち、ファロスと合体した始原の母のときならぬ回帰なのだ。始原の母によってもたらされる享樂は、もとよりファロスの享樂、ファロスによる享樂ではありえない。ファロスの享樂は、母の欲望が封印された後、「父の名」によって認可された現世的、地上的な享樂であり、そのための道具がいかに巨大かつ超人的であろうとも、ファロスによる享樂にはおのずから限界があり、主体の存立基盤そのものを揺るがすにはいたらない。そうで

はなく、『猿の手』において回帰してくるのは、ファロスの享樂とは根本的に異質な享樂、「父の名」によって支えられた世界を瞬時に瓦解させかねない破滅的な享樂、本質的に世界の外、あるいは世界が崩壊した後に体験されるしかない享樂なのだ。「無気味なもの」は、この法-外な享樂の接近を告げ知らせるシグナル、恐るべき始原の母の戦慄的な接近を告げるシグナルにほかならない。

幻想小説を「理性の眠り」、なかならず悪夢と結びつけて論じる幻想文学論は跡を絶たないし、こうした見方にそれなりの真実性があることも確かだが、ただその意味をよく理解しなければならない。上述の『精神分析入門』のなかで、フロイトは言う――

小児の夢を、許容された欲望の公然たる実現だと言えるとすれば、歪められた普通の夢は、抑圧された欲望の仮装した実現だと言えますし、悪夢は抑圧された欲望の公然たる実現であるという公式が成立すると思います。不安は抑圧された欲望が検閲よりももっと強烈にあらわれたこと、抑圧された欲望が検閲に対抗してその欲望を貫き通した、あるいは貫き通そうとしつつあったことのしるしなのです。<sup>22)</sup>

悪夢は、欲望がみずからを「貫き通そう」とするところに生じる。その結果、「それを通じて夢が未知のものにつながる」とフロイトの言う「夢の臍」<sup>23)</sup>がじわじわと拡大し、圧縮と移動、メタファーとメトニミーで織りなされた夢の布地はずたずたに引き裂かれてしまう。その破れ目からひたひたと押し寄せてくるのは、懐かしくもまたおぞましい、あの仄暗い母胎のなかの享樂なのだ。『悪夢』の著者ジョーンズの言うように、「どれほど耐えがたい悪夢でも、不安はしばしばそれとわかる悦樂の色に染められている」<sup>24)</sup>とすれば、それは悪夢が、われわれのもっとも奥処にひそむ禁じられた欲望の湧出であるからにほかなるまい。

\*

もう充分であろうか。いや、最後にひとつ、まだ厄介な問題が残されている。それはこの物語の陰の主役であり、登場人物の運命を背後からあやつる猿の手とはいったい何か、という問いである。もし『猿の手』が作家ジェイコブズの見た悪夢であるとするなら、物語の狂言回しともいうべきこの呪符に、ほかな

らぬ「夢魔 Cauchemar」の象徴を見てとることも不可能ではあるまい。夢魔がしばしば猿や猫などの動物の姿を借りてあらわれるのは周知のことだし、事実、名高いフュスリの絵に描かれた夢魔は、背中を丸めた独特の座り方といい、顔に浮べた卑猥な笑いいい、たしかに猿を連想させるものがある<sup>25)</sup>。それでは猿の手は、夜の闇にまぎれて善男善女の夢のなかにこっそり忍びこみ、禁断の木の実をさしだす悪魔なのだろうか。しかし、ここで見逃してはならないのは、猿の手の発揮するパワーがそもそも両義的であり、禁断の悦楽へと人を導きもすれば、後一步というところで、至福への期待をふいに断ち切ったりもするということである。しかも、猿の手は手首から切断されている。つまり、去勢されているのだ。こんなふうに考えてくると、われわれの乏しい分析的知見のおよぶ範囲では、猿の手に適合しそうなものはもはやただひとつしかない。原父である。あるいは、原父の負の遺産ともいうべき超自我である。

フロイトによれば、人類の黎明期、われわれの先祖がまだ原始的な群れをなして生活していたころ、群れの中心に暴力的で専制的な父親——ラカンの揶揄的な表現を借りれば、「老いぼれたオランウータン」<sup>26)</sup>がいた。原父は群れのすべての女を独占し、息子たちには仮借ない禁止をもって臨んだ。やがて息子たちは共謀して、原父を殺害する。しかし原父殺害の結果は、息子たちの予期に反したものになった。彼らは群れの女には手を出さぬという誓いを立て、死んだ父は部族の守り神、すなわちトーテムとして尊崇されることになった。しかし原父は跡形もなく消え失せたわけではなかった。なぜなら原父の面影、法—外な享楽の記憶は、依然として息子たちのうちに生き続けていたからである。

切断され、「木乃伊のようにひからびた」<sup>27)</sup>猿の手は、息子たちに殺戮 = 去勢された原父の形見ではないだろうか。死んだ父、象徴的な父としてよみがえった原父の象徴化されなかった残滓ではないだろうか。この残滓、それこそが超自我なのだ。生きていたころの原父さながら「みだらで残忍な」<sup>28)</sup>超自我は、息子たちに過酷な禁止の掟を課す。だが、そのことによってかえって享楽の所在を指し示し、不可能な欲望へと息子たちをかりたてる。それは世界の外の、「im-monde」な享楽へわれわれをいざなう声である。死者の声、「甘美な戦慄」にみちた始原の母の呼び声である。

幻想小説特有の「甘美な戦慄」は、実はこのようなところに根を下している。それは始原の母という不可能な中心をめぐるつつ、この中心に対する恐怖と魅

惑、牽引と反撥の互いにせめぎ合う力からなりたっている。カイヨワのいわゆる「現実世界の内的統一」に生じる亀裂は、単にこの矛盾を孕んだ力学に由来する偶発的な出来事にすぎない。「そこでは恐怖が快樂になる」<sup>29)</sup>とカイヨワ自身述べるように、世の幻想文学愛好家が怪談小説を愛してやまないのは、何よりもこの「恐怖」、この「快樂」、エロスとタナトスの両極に引き裂かれた「甘美な戦慄」を追い求めてのことなのだ。いっさいの夾雑物を排し、幻想小説の至純な形態のみを析出したとも見えるジェイコブズの『猿の手』が、このジャンルの代表的な傑作として、今日あまたのアンソロジーに採録されているのは、けだし当然と言わねばなるまい。

## 註

- 1) W. W. JACOBS, *The Monkey's Paw*, Chicago : Academy Chicago Publishers, 1997, pp. 17-30. (『猿の手』、『怪奇小説傑作集』〔江戸川乱歩編・平井呈一訳〕、世界大ロマン全集 24, 創元社, 1957年, 125-142頁)。戦後いち早くこの短篇をわが国の読者大衆に紹介した平井呈一の功績は大きい。平井の訳はすこぶるつきの名訳だが、なにぶん個性的すぎるため、引用する際は少々ニュートラルに改めさせていただいた。
- 2) 『ドイツ炉辺ばなし集』(木下康光編訳), 岩波文庫, 1986年, 13-18頁。
- 3) JACOBS, *op. cit.*, p. 21.
- 4) Sigmund FREUD, *Introduction à la psychanalyse*, Paris : Payot, coll. «Petite Bibliothèque», 1978, pp. 200-201.
- 5) JACOBS, *op. cit.*, p. 23.
- 6) *Ibid.*, p. 28.
- 7) FREUD, *op. cit.*, p. 203.
- 8) Jacques LACAN, «Du trieb de Freud», in *Ecrits*, Paris : Éd. du Seuil, 1966, p. 852.
- 9) JACOBS, *op. cit.*, p. 28.
- 10) *Ibid.*, p. 17.
- 11) *Ibid.*, p. 18.
- 12) *Ibid.*, p. 21.
- 13) *Ibid.*, p. 29.
- 14) Roger CAILLOIS, «De la féerie à la science-fiction», in *Obliques*, Paris : Stock, 1975, p. 15. (『妖精物語からSFへ』〔三好郁朗訳〕、サンリオSF文庫, 1978

- 年, 12 頁)。以下, いちいち頁数を付記しないが, 訳文を参考にさせていただいた。
- 15) *Ibid.*, p. 22.
  - 16) *Ibid.*, pp. 16–17.
  - 17) Charles PERRAULT, *Contes*. Textes établis, avec introduction, sommaire biographique, bibliographie, notices, relevé de variantes, notes et glossaire, par Gilbert ROUGER, Paris : Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», 1967, pp. 81–86.
  - 18) 『千一夜物語Ⅲ』(佐藤正彰訳), 世界古典文学全集第 33 巻, 筑摩書房, 1966 年, 65–66 頁。
  - 19) Cf. PERRAULT, *op. cit.*, p. 79 (notice de Gilbert ROUGER).
  - 20) Sigmund FREUD, «L'inquiétante étrangeté», in *L'inquiétante étrangeté et autres essais*, Paris : Gallimard, coll. «Folio», 1985, p. 215.
  - 21) *Ibid.*, p. 252.
  - 22) Sigmund FREUD, *Introduction à la psychanalyse*, *op. cit.*, pp. 201–202.
  - 23) フロイト『夢判断(上)』(高橋義孝訳), 新潮文庫, 1969 年, 146 頁。Ignace MEYERSON の仏訳にはこの部分が欠落している。「臍」という表現が「検閲」の対象になったのであろうか。なお, ラカンの次のセミナーも参照のこと—— Jacques LACAN, *Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*, Paris : Éd. du Seuil, 1978, pp. 188–189.
  - 24) Ernest JONES, *Le Cauchemar*, Paris : Payot, 1973, p. 37.
  - 25) フェスリの「夢魔」に関しては次の論文を参照—— Jean STAROBINSKI, «La vision de la dormeuse», in *Trois fureurs*, Paris : Gallimard, 1974, pp. 127–162.
  - 26) Jacques LACAN, *L'envers de la psychanalyse*, Paris : Éd. du Seuil, 1991, p. 131.
  - 27) JACOBS, *op. cit.*, p. 19.
  - 28) Jacques, LACAN, *L'éthique de la psychanalyse*, Paris : Éd. du Seuil, 1986, p. 15.
  - 29) CAILLOIS, *op. cit.*, p. 31.